

# 学は無限

—会長就任挨拶に代えて—

会長 渡辺豊和

った。ところが随分失礼なことだが執筆中の資料として直接役立つわけでもなく忘れてしまい、お蔵入りとしてしまった。

突飛なことで恐縮だが最近読んだ本である。『成吉思汗は源義経』。一九七八年刊だから随分古い。一〇年以上前、当時調査中だった北東北の中世史のうち岩手県東北部の義経伝説の地を訪ねてこの本のことを知った。もうこの時点で絶版ということでのこの地の図書館から全面コピーをいただいた。著作権違反なのだがこの人たちはそんなこと気にもとめる様子もなか

資料整理していてこれをみつけ読んでみて感心した。著者は三人で最も年少でも今生きているなら九五歳になつていよう。それほどあれ何に感心したかといえば、著者の中核佐々木勝三の義経伝説の調査が精細克明なことだ。岩手県平泉町衣川から北海道中部まで義経伝説地を限なく踏査した資料を比較検討し伝説が義経逃亡の足跡と人々に確信させるに足るまで

に至っている。要するに説得力充分なのだ。三三年かけた追跡でありこうなれば間違いなく学問である。

衣川で死なずジンギス汗は源義経の後身であったというのはあまりに奇想天外、荒唐無稽。誰でもそう思うに違いない。しかし明治時代の東京大学教授、歴史の大家、末松謙澄が一八七九年にロンドンでそんな内容の論文を歴史学会で堂々と発表している。日本国内でも和訳し刊行したら大評判になっただけではなく立派な学説としてまかり通った。

それ以後これに対する反論が歴史学会で巻き起こり次第に否定の方向に傾いたのはいうまでもなく、現在ではまったくの俗説として一顧だにされない。

しかし佐々木勝三の丹念な調査では義経は衣川では死なず北海道に渡り、日本海岸中部の港、増毛から大陸を目ざして出航したことをつきとめている。衣川からそこまでの足跡は数珠つなぎに伝説や石碑、義経を祀る神社があり途切れないのに増毛で消息がぶつんと切れてしまい、しかもそのあたりに居住していたアイヌは義経はここ

から大陸を目ざして船出したと言  
い伝えている。

大陸では沿海州から満州（現在の  
中国東北地方）にここでも数珠つ  
なぎに消息を伝える伝説や物証が  
残されている。それはアムール河  
沿い上流に遡り、途中で内陸に入  
り満州西部を横断、モンゴル平原  
の入口で消えている。

佐々木勝三らジンギス汗・義経後  
身説者はこれ以後は義経がジンギ  
ス汗になっていった一つの証だと  
いうのである。

佐々木のみならず末松謙澄以来の  
同説論者は義経とジンギス汗の戦  
術が酷似していることを指摘する。  
有名な鶴越えの断崖を騎馬で駆け  
下り背後から敵を奇襲した方法等  
いくつかを比較検討し、軍事専門  
家に意見を聞き、同一人でなければ  
ありえないとの結論をえている。  
だからといって同説が正しいとい  
うわけではない。どんな奇想天外

な説でも丹念に調査し資料を比較  
検討していけば証明される可能性  
があるということである。

イワクラ学にもこの丹念な現場調  
査が求められている。学問は何も  
専門家の専売特許ではない。イワ  
クラ学にとってエジプトのピラミ  
ッドの存在が大きい。今から五〇  
〇〇年前、日本では縄文時代の真  
只中に、あれだけの精緻な構築物  
があり古代科学の精髓を貯蔵して  
いたのである。

私たちが今調査研究中のイワクラ  
の種々様々な機能もピラミッドと比  
較検討することで浮かび上がって  
くる可能性が大なのである。如何  
に遠隔地に居住する人間同志も同  
時に同じ現象、知識を発見、発明  
することが可能なのだから、遅れ  
ているとか進んでいるといったこ  
とは本来ないのだ。同時代の日本  
のイワクラもピラミッドと同じ意  
味をもつということだ。勿論それ

以外の可能性もあるだろう。

2008年 吉日